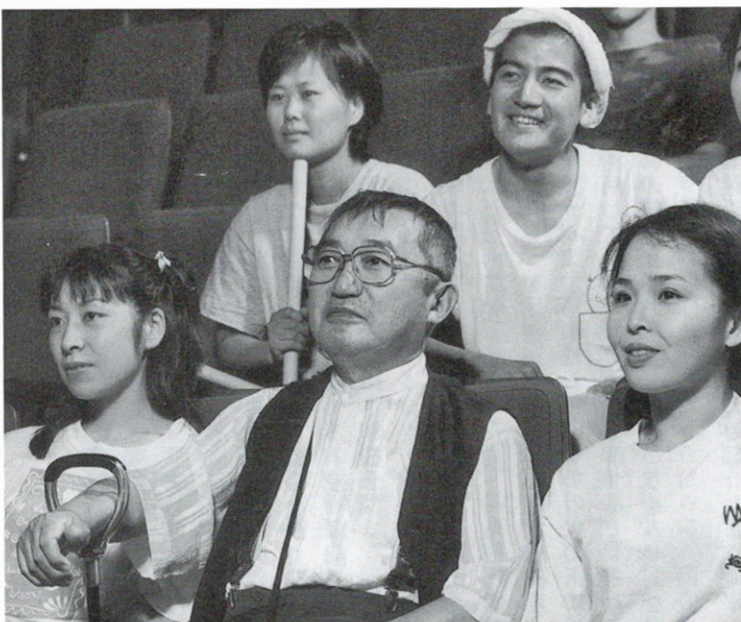


## 第二章

# 活躍する石桜群像



劇団員と客席に座って観客の立場で舞台稽古を見る

さまざまな分野のさまざまなポジション

で頑張っている人たちの姿を、空飛ぶ鳥の視点から一望できたなら、さぞかし壮観であらうと思う。

その眺めは、母校が歴史を重ね、人材を輩出しつづけることによって描いた人物地図に他ならない。

石桜育ちの人物地図上に広がる数え上げればきりが無い「異才」のなから、ここでは四人の人にご登場いただいた。

世代も活躍するフィールドもそれぞれ異

なる四人だが、母校で過ごした青春時代に将来へとつながる何かをしっかりとつかんでいることでは見事に共通している。

インタビュに答える彼らがみずからの岩中・岩高時代を振り返るとき、その表情のなかに、いまある自分の原点を見つめなおすかのような懐かしさと愛しさが浮かんでいた。

## 自分をどう客観視

——演劇に求められる姿勢——

「自分の内部へというか、ムラならムラの中へと入っていく自分を感じる」と語る。外に向かうのではなく、中に向かっている。「求心性」が自身の生き方なのか。

三十代で早くも日本演劇界で頭角を現した。劇団三十人会の代表となり、第一回紀伊国屋演劇賞、第十四回岸田国土戯曲賞を取る。演劇人としてそれだけで十分な評価のだが、「私の仕事は大上段に構えるものではないが、せん。大切なのは、自分をどのように客観視

するかです」と、世評よりも演劇人として自身はどう生きるかを常に求めてきた。

興味は人間である。「演劇は人の生き方がモデルです」といい、自らの作・演出作品では「観客が何を芝居に求めているか、客に伝えるものは何かがあるか」に心してきた。

特段テーマを掲げてこなかった。「私の演劇はそれほど理屈や主義主張があつてのことではないんです。観客と共感したいし、また演劇愛好者へのお手伝いをやりたい。私は補



「大切なのは自分をどう客観視するかです」

完する仕事に興味を持ってます」と語る。この考えは若い時分からそう変わっていない。演劇の内側の観客と演劇の在り方を考えているからなのだろう。

演劇との出会いは高校時分である。「盛岡で燃える時期に育った。その環境もありますね」。戦後の荒廃期、当時の若者たちは精神的な飢餓状況にあった。戦争で抑圧されていたものが一気に爆発した。文字や美術、演劇などだった。「燃える時期」とはそういう時代だった。

今、奈良市にいる。作家で演出家で大学教授でもある。若者たちに演劇論を実地に教えている。力説しているのは、「自分をどう客観視するか、芝居が思い上がっていないかを

見れる人間です。自分だけが陶醉してはいけません」と厳しい。演劇が人間の可能性や生き方のヒントや創造力を与えるものなら、制作したり演じる人間に思い上がりがあつてはならないというのだ。

「功利は弁舌したくない。気が引けます」という。「未見の運命を担ふ牛の如き魂の造型を」と「岩手の人」に書いた詩人高村光太郎の詩を思い出す。

「世界に向けてと思うより、狭いところの共感や弱い人の立場に立ちたい。それを、私が見るところでやればいいと思っています」と語る。熱っぽく、自身に言い聞かせるような話し方である。

(R記)

## 秋 浜 悟 史

あきはま さとし

新5回生

昭和9年3月、玉山村波民生まれ。早稲田大学文学部卒。岩波映画製作所に入るが41年同所を退社し、劇団三十人会を創設し代表となる。42年「ほらんばか」の作・演出で第1回紀伊国屋演劇賞受賞。44年「幼児たちの後の祭り」で第14回岸田国士戯曲賞受賞。現在大阪芸大舞台芸術学科科長、兵庫県ピッコロ劇団代表。

日本文芸家協会・日本劇作家協会・日本演出家協会の会員。奈良市在住。



稽古を見守る。厳しい口調だが後輩をいたわるまなざしがある